

## 第九回太平洋学会研究大会における講演

太平洋戦史研究部会主催

日本海軍の暗号はなぜ解読され  
陸軍の暗号はなぜ解読されなかつたか

講師 長田 順行

(日本暗号協会会長)  
(元海上自衛隊通信保全業務隊司令)

とき 昭和六十一年十一月二十九日

ところ 五島美術館別館

## 疎かにされた補給兵站と暗号

長田 毛色の変わった話をいたしますが、きょうこの題名は、太平洋学会のほうからご指定をいただきました。題でございます。実は陸軍の暗号も解かれておったのが、きょうのお話の結末でございます。

「軍艦マーチ」といいますのは、帝国海軍では最も勇壮で、しかも親しまれた行進曲であります。この歌詞の冒頭は「守るも攻めるもくろがねの云々」ということで始まるわけでございますけれども、守るも攻めるもともに海軍がバカにしたといえますか、疎かにした点が二つあります。

すなわち補給兵站という問題であります。もう一つは、いまからお話しようとする暗号の問題であります。これは強度の問題もありますし、暗号書をつくるという問題、そしてそれを配るといふ問題、あるいはその保管をいかに大事にするかといった問題を含んでおるわけであります。

とりまして、暗号による大きな敗北というものを上げてみますと、日本の場合は、まずミッドウェー海戦の敗北というものが第一にあげられるわけです。第二には、山本長官機行動電報の解読による不世出の提督の戦死という問題があげられるわけです。第三は通商線の破壊ということがあげられるわけでございます。

ドイツの場合は、これはUボートの撃滅に暗号の解読が繋がったということ、そしてノルマンディーの上陸作戦をたやすくなさしめたということが大きな事件であろうと思うわけです。

ところで、一九四一年、すなわち昭和十五年の末、新しいアメリカの大使に赴任しますイギリスのファリアックスを乗せて、当時の新鋭戦艦のキングジョージV世が、アメリカに行ったわけです。そうして一月にはその帰途にありました。その時にフランク・バイロン・ロウレット (Frank Byron Rowlett) という陸軍の文官の暗号専門官を団長にいたしまして、陸軍と海軍の将校、これは暗号の専門家の将校ですが、合計五名がこの船に乗せておいたわけです。

フランク・バイロン・ロウレットは、のちに、ジョンソン大統領から国家安全保障勲章というものをもらっていますし、アメリカ議会はその功勞に対して十万ドルの褒賞金を出したという有名な人物でありました。

実は彼らが携行しておいた暗号物件一覧表が、いまここ (オーバーヘッド・プロジェクト画面。以下OPと略す) でお示しをしておるのでございます。

本日のテーマは、海軍と陸軍でございますので、外交暗号のほうについては詳しくは触れないことにいたします。

いずれにしても、海軍から供与を受けて昭和六年に製作した、向う側でレッドと呼んでおる、いわゆる九一式の印字機、これの模造機が二台、開戦の年の一月にはすでにイギリスに渡されておった。さらに主要な大使館で使っておりました九七式欧文印字機、これも模造品が二台、二号機と三号機がイギリスに渡されておった状況であったことを、まず頭の中に入れていただきたいわけがあります。

さらに今度は海軍の場合であります、艦隊用の暗号書、これは昭和十五年まで使われたものでありまして、米軍はこれをJN-25と呼んでおったわけです。

あとでお話をいたしますミッドウェー海戦当時のもの、いわゆる海軍暗号書D、すなわちD暗号というものは、JN-25bと呼ばれたものでございます。そのほかにも輸送用の暗号書であるとか、海軍武官用の暗号書というようなもの。これは盗写したものも含まれておりますし、あるいは実際に理論的に解読をして、ある程度復元したものの複製が含まれております。こういった状態で太平洋戦争が始まったということ、是非覚えていただきたいわけでありまして。

### 領事館で盗写され続けた暗号

翌年になりますと、イギリスはその見返りとしたしまして、アメリカに、ドイツが使用しました暗号機並びに、その暗号の規約、並びにその解読法というものを供与いたします。

これが (OP) がドイツの使っておりましたエニグマ (Enigma) という暗号機でございますが、イギリス側がドイツの暗号を解いたもの、これは情報資料を「ウルトラ」と呼ぶわけですから、アメリカ側が日本の暗号を解いたもの、これを「マジック」と呼ぶわけです。

一見、太平洋戦線とヨーロッパ戦線は分離されているとよく考えられるわけですが、情報の交換という意味においては、両戦線は一つの形で、イギリスあるいはアメリカにおいては行われたということでございます。

ミッドウェー海戦に入ります前に、一つだけ追加をしておきたいのは、昭和五十三年に、アメリカの海軍の通信情報機関の育ての親であるロシュフォード大佐の書いた『米國通信諜報史』という資料がありまして、これは当然機密書類でありましたけれども、これが公開をされたわけです。

これ (OP) が内容であります。こういった記事が新聞に出たことを、ご記憶であろうと思います。また、この内容について、日本の新聞も記事を発表しております。

この中でやはり非常に注意を要する点は、特にニューヨークの総領事館では、外務省の暗号であるとか、あるは海軍の暗号というものが、幾度か盗写され続けたということでありまして、ポール・ヴァレリ (Paul Valery 1871-1945) の言葉に、「歴史は、その未来に情熱を持つ人々のためにのみ歴史である」という言葉がありますけれども、今日も、暗号の戦争は好むと好まざるとにかかわらず続いておるわけでありまして、こういった事態は、過去のものとして見過ごすわけには行きません。

たとえば昭和十一年に長門が改装をいたします。当時アメリカは、長門の速力を二十三ノット半と考えておったわけです。そこでノースカロライナであるとか、あるいはワシントンという戦艦の建造では、二十四ノットの速力を持たしておけばよいだろうというように判断をしましたが、長門の改装後の、いわゆる試運転といいますが、この結果を報告した電報がアメリカ側に解かれておりました、それによると二十六ノットであるということが判明しました。

そこでノースカロライナ、あるいはワシントンの速力を二十七ノットに上げるという措置をとったというようなことも、このロシュフォードの文書の中に詳細に書かれておるわけです。

## 暗号の更新が遅れていた

さて、大きな敗北を受けましたミッドウェー海戦について話を進めるわけですが、これはどういう経緯で、どういったものを使ってということとを細かく述べる時間はとてございません。

そこで特に要点を一点に絞りまして、暗号の更新が昭和十七年の五月一日に本当に行われたか、解いたアメリカ側がいうように、十七年の六月一日まで暗号が更新されなかったのか、この一点についてその証明をしてみたいと思うわけであります。

ミッドウェー海戦というのは、当然ミッドウェー島の攻略を目差した日本の作戦であったわけでありまして、この作戦の結果、加賀、赤城、飛龍、蒼竜、それから重巡の三隈、こういった空母、あるいは巡洋艦が沈められるわけでありまして、そして飛行機については、被害は約二倍の被害を受けております。人員については向うが約三百名に対して、十倍の死者を出しておるわけであります。

したがって、空母兵力の優位を誇った日本海軍が一転してその主導性を失うことになった、有名な海戦でございます。

それでは当時使っておりました暗号

書の一部を、ちょっとトラペア(OP)でご覧に入れます。

ここに現物をお持ちしておりますので、話をしております間に、回覧をしていただければよろしいかと思っております。こういった形でケースに入っておりますものは、当時ミッドウェー海戦で使われたD暗号書の暗号書自体の組立用であります。艦船の部を示しております。たとえば連合艦隊司令官旗艦と

いうのは、59124という五桁の数字に置き換えるようになっておったわけでありまして。

これには当然翻訳をする表が必要になります。

これ(OP)が翻訳表でございますが、ちょうど59124というところを引きますと、連合艦隊司令官旗艦と

いうのが翻訳できるような形になっております。

それから暗号書の中にはとても地点等は入れることができません、というのは大変厚いものになってしまふ。そのために別冊として特定地点略語表というものが使われたわけがあります。

さて、ミッドウェーがAFであるかどうかを確定するために、米海軍は蒸溜水不足という無電を打ったという話があります。この特定地点略語表でAFがミッドウェーであることになって

ます。

当時使われておりました、特定時点略語表を回覧いたしますので、ご覧

ただければ結構でございます。

何分にも沈没した船から引き揚げてありますので、もう、周りのほうは痛んでおりますけれども、当時のものであるということ、ご覧をいただきたいと思っております。

当時の暗号は、当然五数字に置き換えた形だけでは、電報が発信されてお

りませんので、必ず乱数表というものが、これに加え算をされたわけであり

ます。

たとえば、これ(OP)は五百ページ目を差すわけですが、一ページには五数字の乱数がちょうど百ワード入っております。上下巻とも千ページになりますから、約十萬語の乱数系列を、先程の連合艦隊旗艦という五数字にど

っかからの乱数を加え始めて、それを加えた結果が電波として飛んでおった

ということでありまして。

そこで、なぜ私が更新の問題を云々いたすかと申しますと、ご承知のことと思えますけれども、昭和十七年の五月の五日にミッドウェー島作戦に関する陸海軍の中央協定というのが発令をされるわけです。そして八日に珊瑚海の海戦がありまして、二十日にミッドウェー島作戦に関する細部の計画が発令される。そして二十七日、二十九

日に第一機動部隊、あるいは主力、攻

略部隊が柱島を出撃をするわけであり

ます。

つまり、ミッドウェー作戦に関する主要な電報は、この五月の一カ月間に発信をされたというわけです。そこで実際に暗号書はどういう形で替えてお

ったか、更新しておったかと申します

と、まず、D暗号書というものは、昭和十五年の十二月一日に替えられて、

そのまますーっと開戦になりましたも、

そのまま続いていた。彼らはこれを

JN-25bと呼んで、攻撃目標にして

おったわけでありまして。

そして乱数表は開戦の年の十二月四

日に替えられておりました。

そこで、もし五月一日に日本海軍の

企図した通りに更新をしておりますと、

この五月に出た電報を一カ月間で新し

い暗号書を解読をし、そして乱数系列

を再現をして、そうして内容を読み取

るということは、おそらく、今日のコ

ンピュータの発達した時代でも難しか

ったろうと思うわけです。

## 更新遅延の証拠が残っていた

しかしながら、あとでお示しいたしますように、日本海軍はどういった関係か、実際には六月一日まで暗号書を替えませんでした。旧海軍の関係された方々は、いや、五月一日に替えると

軍艦「熊野」接授電報一覧表 (第一表)

日付	発信者	番電	内容	暗号種別
17.4.19	北方部隊	294	戦闘機報	D
5.11	4 F (第4艦隊)	481	"	DD
5.17	1 KF (第1南遣艦隊)	234	"	DD
5.17	3 KF	199	"	DD
5.22	東印部隊	258	"	DD
5.23	4 F	729	"	DD
5.25	6 F	727	"	DD
5.26	基地航空部隊	949	"	DD
5.31	1 KF	373	"	DD
6.8	AQ 攻略部隊	94	"	D1
6.9	機銃	819	"	D1
6.15	4 F	47	"	D1
6.20	1 KF	515	"	DD
6.24	基地航空部隊	317	"	DD
6.26	北方部隊	791	"	DD
6.26	東印部隊	673	"	D1
6.27	4 F	189	"	DD
7.2	基地航空部隊	322	"	DD
7.10	機銃	266	"	DD
7.14	基地航空部隊	330	"	D1
7.17	4 F	804	"	DD
7.31	東印部隊	113	"	DD
8.1	4 F	326	"	DD
8.2	4 F	321	"	DD
8.5		261	"	DD
8.9	8 F	213	"	DD
8.10		801	"	DD
8.16	東印部隊	16160594	"	呂1
8.17	東印部隊	...	"	D2
9.19	4 F	19110576	"	呂1
8.25	機動部隊	25105010	"	呂1
8.27	機動部隊	27140562	"	呂1
8.28	4 F	28081070	"	呂1
8.28	4 F	28081009	"	D2

長田順行著「暗号」(現代教養文庫1134, 社会思想社, 1986年)より。

いう電報が残っておるといわれるが、実は替えていなかった。実はその電報も私が発掘をしたものであります。しかし、私は、過去約三十年間、戦後の防衛庁、あるいは海上自衛隊で暗号の解読に、約十年間実際に従事し、さらに暗号の作成、運用といったものを実務に十年間従事し、さらにそれらを統括する部隊の指揮官を十年間やってきたわけでありまして、当時のものは、私はいま問題を出して解けといわれれば解き得る力を持っておるわけでありまして、その辺のところの解け

る解けないについては、信用をしていただく以外にはないわけでありまして。そこで実際に五月一日に替えるという電報が出ましたけれども、何分にも当時のミッドウェー作戦の参加艦艇は約三百数十隻に上るわけでありましてこれに陸上部隊が入るわけでありまして、ここに全部新しい暗号書、乱数表、あるいは使用規則、そういったものを配り終えるということとは、当時不可能であったと考えられるわけですから、その証拠は、次の電報によって、証明をされます。

実は更新を延期したという電報は、いくら探しても現存はしておりません。しかし、世の中には規則違反をしたことが後世の歴史のために非常に役に立つ例があるわけです。といいますのは、軍艦熊野というのがあります。これは重巡でありまして、ミッドウェー作戦にも、第二艦隊の第七戦隊旗艦で参加をしておるわけですが、この艦長が自分のところに届けられた暗号電報の、訳文の写しをどういう加減かずつと保存をしておいた。そしてその艦からリタイアされた時もそれが衣囊の中に入って、自宅に届いておったわけで、戦後になってそれが見つかって、防衛庁の戦史室に寄贈されました。

この電文綴り以外には、ミッドウェー作戦等に関連する電文綴りというのは、とにかくいまのところ、防衛庁には、ないわけです。

私は、これをまことに偶然な機会に捜し当てたわけでありまして、当時の電報には必ず、どうい暗号でもってそれを発信したかという種別が載っておるわけでありまして、それを一応羅列したのでこの表(第一表)であります。ここでこの表を見ただけで、海軍がどうい形で暗号の更新を行って行ったかということがすぐわかるわけです。

まず第一番目は、五月一日に替えたといっていますけれども、実際に五月に何通かの電報が出ておりますが、全

部暗号の種別はDであるということが明らかであります。そして五月三十一日から六月八日、この間に電報はありますが、ここを境にして、今度はD1という新しい暗号書が使われ出しておることがわかります。

杜撰だった暗号の使い方

そしてその新しい暗号書も、なお届いてない部隊がたくさんあって、実際にはもう使ってはならない古い暗号書を同じように併用をしておる状態がここでよくわかるわけでありまして。これは暗号の原則では最も慎まなければならないことなんですね。

解かれるかも知れない。あるいは解かれたかも知れないから暗号書を新しいものに替えるわけです。ところが新しいものに替えた時に、全部に行き渡っていないからといって、古いものを一緒に使えば、たとえば同じ内容があるところには新しいD1で行き、別の部隊には古い暗号書で行くということになり、もとが解けておれば、新しいものはまた解かれてしまうという状況が起こるわけでありまして。

そして日本海軍はミッドウェーの作戦で、大変な打撃を受けたわけでありまして、八月の十五日に、今度は今までのアルファベットの呼称から、漢字の「呂」という呼称の新しい暗号書に

暗号書を替えております。

そして今度、昭和十七年の十月の半ばごろ、あるいは初めかも知れませんが、ここで「波1」という暗号書が出てきます。ちょっと覚えておいていただきたいのは、のちの山本長官機の行動電報の暗号の種別が「波1」という暗号書だからでございます。山本長官は十八年の四月十八日に戦死をされるわけでございますけれども、その行動電報の暗号書が使われ出したのは、昭和十七年の十月の十五日、もしくは一日であったということをご記憶いただきたいと思えます。

そこでこの表は私が任意につくることがができるわけですね。自分の説を立てるために任意につくることができますので、この六月一日を挟む四通の電報をいまからご覧にいたします。この暗号種別を見ていただければ、この表が正しいことをおわかりいただけると思わうわけでございます。

まず、五月の末に類するものでございます。これ（OP）は五月二十六日の電報です。D軍極密の略であります。使用暗号はDという暗号書であって、軍極、いわゆる秘密の程度は軍極秘であるということが書かれております。

それから幸いに五月三十一日の電報があります。これ（OP）が発令の日時になるわけですが、これも同じくD軍極密となっております。

それが六月に入ったら、いかなっているかということでありますが、これ（OP）は六月八日の電報であります。ここには明らかにD一軍極密ということが書かれております。

同じく六月九日の電報（OP）でもD一軍極密ということが書かれております。これによりまして、結局、もし、日本海軍が予定どおりに暗号書を替えておったならば、少なくとも、敵の艦長たちが日本の艦長たちが知っていると同じ程度の情報を持って田案狭間に赴いたということは、少なくともなかったということになるわけです。

しかし、残念ながら、暗号書の作成、補給という問題が伴わなかったために、日本海軍は六月一日まで暗号書更新を延ばさざるを得なかったところにミッドウェー海戦の、いわゆる情報面の敗北の大きな原因があるということ、ミッドウェー海戦については終わりたいと思えます。

### 暗号書の作成、補給に要する 膨大な人員

そこで作成、補給の問題というのが非常に大変であるというわけですが、たとえば私は、ライシャワー大使のテレビ番組に出まして、後に築地の「田村」でライシャワー夫妻とお話をする機会があって、ライシャワー氏そのもの

のが、当時、アメリカ陸軍の暗号解読の部門に携わっておられたんですが、その時に聞いた話がございます。

これ（OP）は太平洋戦争中、アメリカの陸軍が使ったM-209という暗号機でありますけれども、暗号では規約といいますが、いわゆるセットの仕方、これは十の七十乗ぐらいセットの仕方があるんですが、それをとにかく彼らは八時間おきに替えたんです、戦争中にですね。

そのためにアーリントンホールに約四百から五百名の兵員を、この暗号機のセットを替えるだけのために投入をしておいたということ、ライシャワー博士がいつておられましたけれども、これに比べますと、海軍が暗号書の作成、補給というものに当てた人員というものは、少なくとも、全部集めてもそれだけの数はいなかったんではないかという気がしてならないわけです。

### 諜知された山本長官の行動

ところで、ミッドウェー開戦による敗北、そして昭和十八年の二月には、ガ島の撤退があります。そこで帝国海軍は戦局の巻き返しをするために、ガ島周辺のアメリカ軍の根拠地を叩くというところで、山本五十六長官は、将旗をラバウルに進めることになるわけです。四月三日でございますが、これはいま

の方はご記憶ないですけれども、昔は神武天皇祭でありまして、由緒ある日にラ島に将旗を進められたわけであります。

そうしてブーゲンビル島の最前線基地を視察をするということになります。これはもう映画やテレビその他でござりますが、視察に行かれる途中、ブイン上空で、敵のP-38に迎撃をされて機上で壮烈な戦死を遂げられるということでもあります。

なぜ、それが可能であったかということについては、ほとんど最近まで議論百出でありまして、定説はありませんでしたけれども、私がいまここに、資料を閲覧に入れることによって、皆様方がそれにご賛同になるかどうかは、これはご自由でございますけれども、私の考えを申し上げます。

現在、残っている記録によりますと、結局、日本帝国海軍の暗号関係者の結論は、わが企画の諜知は十三日の南東方面艦隊司令部よりの発電、これはのちに現物をご覧にいたしますけれども、行動予定の電報を解読したるにあらざれば不可能である。しかも乱数表は十八年の四月一日に替えられ、わずかに二週間しかたっていないかった。

そして事後の敵の放送発表等も合わせ考えてみると、偶然遭遇したと判断される事情が濃厚だ。これが山本元帥の国葬関係綴りに残っておる当時の

結論でございます。しかし実際には、彼らはこの暗号を解いて迎撃をいたしました。

先程申し上げましたが、「波1」という暗号書は、約半年前の十七年の十月一日に替えられております。それから乱数表は、電報が出るわずか二週間前に実際に替えられておるわけでありまして、これがなぜ解けたかということがあります。

そこで十三日の南東方面艦隊司令部から打たれた電報というのは、どういう内容であったかということですが、それはここ(OP)に示したような内容でございます。

131755番電という、有名な電報で、先頭の13というのは十三日を示しておるわけでございます。

ここにRXZとか、RXEとか、R Rというような地点が出てきますけれども、これはミッドウェー海戦の時にAFというのがミッドウェーのことを示したという特定地点略語で、括弧でバラレとか、シヨートランドと入っているのは、あとから入れたわけでありまして、実際に解かれた状態では、RXZとか、RXEとあるだけで、それどこを示すかということ、全然敵方にはわからなかったわけでありまして、その辺を彼らがどのようにして決めて行ったかということ、解読した資料は物語っておるわけでありまして。

使っておった暗号は「波1」という暗号である。すなわちD暗号書と同じような系列のもので、それに五桁の乱数を加える暗号方法であったということとであります。

ここでご承知いただきたいのは、暗号書を変えた、更新をした、あるいは名前が変わったという場合には、通常の辞書の編纂をお考えいただければわかるわけですね。コンサイスの辞書が改訂をされたといっても、実際には中にある語彙が全然ばらばらになって、全く前とは違ったものになったということではないんですね。補足をする、あるいは削除するという程度のものなんです。

それに当てる郵便番号の表示が変わったというのが暗号書の更新だとお考えいただければいいと思います。ですから、一度解けてきますと、次に新しい、いわゆるコンサイスの辞書をつくっても、前の辞書からそれが類推ができるという非常に弱点を持っておることも頭の中に入れておいていただきたいわけですね。

### 解読の筋道を示す米軍資料

そこで、実際に解かれた電報をご覧に入れます。これ(OP)は当然英訳をされておるわけですが、「日本時間の四月十三日1755番電」と

いうのは、とりもなおさず先程のNT Fの南東方面艦隊から出された電報(131755番電)である。そしてTOI、タイム・オブ・インターセプト、すなわち、傍受したのは四月十四日の零時九分の日本時間であったということが表示されておりまして、先程、日本語で見えていただいた内容の英訳がこの中に書かれておるわけでありまして。

それで地点はどこどころRXZであるとか、RXZであるとか、あるいはRで、以下は不明であるというような形で書かれております。そして詳細は抜きますけれども、この辺にプランクの個所が何カ所かありまして、これ(OP)はいま解けた電報と実際に日本軍が発信をした電報を重ね合わせたものです。

紫色で印のしてあるところはいまの電報では解けていない部分を指します。ですから何も印のないところはちゃんと解けておるわけですね。

紫色で印のしてある、当日の指揮官は陸戦隊の服装・略綬とすると、それが当日の服装だとか、あるいは内火艇がどうだとかいうようなことは、解いておっても平素の戦略用の暗号書にはなかなか出てこないですね。

ですから、初めて出てきたり、あるいは二、三回しか出てこないようなところは、彼らも暗号書を再現してないわけですね。ですから、これだけの空

欄が生じるわけでありまして、これは実際にコードブックに乱数を掛けたものの解読を経験してみますと、まさにその状況を雄弁に物語っていることが解るわけでありまして。

この中に特定の地点が出てきますが、これを当時の特定地点略語表で見ますと、こういうことになります。これ(OP)はいまお返ししている略語表の中にあるものでございますが、RRというのはラバウルのことです。RXEはシヨートランド、RXPはブイン、RXZはバラレを差すというわけでありまして。彼らはこれがわかっていないから、先程解いた内容にもRXZとか、Rなんやらという形ですが、まだ書いておらないわけですね。

これに連続をいたしまして、米軍が解いた資料が続きます。実際は二通あるんですが、一通だけご覧(OP)に入れますと、彼らがどうして特定の地点を実際に行ったかということとあります。ある不明の地点については、バラレから駆潜艇で四十分の距離にある。ということはバラレから駆潜艇の速力に時間を掛けて、コンパスでずーっと円を描いてみますと、その交点にある日本海軍の基地であるということ、その不明の地点は意味しているというようにして、彼らは決めて行くわけですね。

あるいはもう一つの点、RXPにつ

いて、これがブインであるらしいことは、バラレから飛行機で十分の距離にある。これも航空機の速力に、時間を掛けてコンパスで描いてみれば、これがいわゆるブインであるらしいことは判明をする。このようにして彼らは解いて行ったわけでありませぬ。

ですから、とにかく暗号書も何も、みんな盗んでおって、ただ、ボンと解いたというものではなくて、この解読資料が物語るものは、少なくとも「波1」という暗号書、並びに特定地点略語表は、この時点では彼らは入手していない。しかし、ある程度解かれておいて、情報を出すところまでは解けていたということが解かるわけです。

それで、こういう電報は通常は軍規に触れるんで、そういう電報を打ったら処罰をされるんですが、最後に「獲物を見付けた、それ行け、野郎をやっつけようぜ」なんていうのが、太平洋艦隊の諜報班の電報に出ておるわけですから、山本長官もたまったものじゃないわけですね（笑）。

### 盗まれていた乱数表

ところで、実は、乱数表は四月一日に替えて、わずか二週間しかたっていないということですが、私は、これは盗まれたと思っています。これを証拠付けの資料が、二月十八日に出ている電報

で明らかです。というのは、海軍次官から出た電報であります。土中に埋むる等、これが処分不十分なるもの、報告を遅延し、甚だしきは半年に及んだものがある云々」ということで、危急時の暗号書の処分に関する通達というのが出てくるわけです。

ところが、この一月の二十九日には潜水艦の名前をあげることとはちょっと憚るんですけども、伊の一号という潜水艦が、ガ島のカミンボ沖で、実は沈没、擱坐をするわけです。これは二隻のニュージールランドの艦に爆雷攻撃を受けまして、浮上をする。さらに体当たりをくらう。

体当たりをするのは、日本ばかりが得意じゃなくて、ニュージールランドも体当たりをする。とにかくやつつけさえすれば勲章がもらえるわけですから、彼らも勇猛に戦いをやっておるわけですが、そこでこの潜水艦の生存者は六十五名ぐらいいりまして、すぐに陸上に上がるわけですね。

そのとき、一部の暗号書は船に残した。擱坐をして艦首は出ているわけなんです。そして、陸上に上がりまして、四カ所に暗号書を埋めたといわれているんです。そして、実際に埋めたいらしいところに一度は空襲をするんですね。日本の飛行機が飛んでいって、爆撃をして、それを粉砕してしまおうとするんですが、それでも十分にできないと

いうことで、最後に取りに行ったところ、二カ所からしか暗号書は発見できなかったといわれております。

私はこの史実を考えて、そして二週間でも非常に難しいということ、現在でも非常に難しいことを考えてみますと、暗号書そのものと、特定地点略語表は理論的に解析され追隨されておった。しかし、乱数表は替えはしたんだけれども、こういった事故によって敵の手に入っておって、あのNTF（南東方面艦隊司令部）の電報の、解読作業が完了したと思うわけがあります。

### 陸軍の暗号も解読されていた

非常に駆け足で海軍の二つの大きなイベントについてお話をしたわけでありますが、きょうの表題には陸軍暗号は解けなかったとなつてはいるんですが、実は、陸軍の暗号も、いわゆる理論的に解読されたというのは、ちょっとおこがましいかも知れませんが、少なくとも、昭和十八年、十九年になりますと、ほとんど完全解読に近い状態にあった証拠をご覧に入れます。

陸軍の暗号と海軍の暗号を同列に論じるのは、実は無理なんです。といいますのは、陸軍は平時は内地にいて、有線でやりとりをしているわけですから、いわゆる一番最初のフランク・バ

イロン・ローレットが持っていった、イギリスに供与した資料でもわかりますように、平時は、解読の対象にはならないんですね。電波がキャッチできないわけですね。

ですから、陸軍の場合と海軍の場合で、いつも陸軍のほうが強いというんじゃなくて、条件的に有線を多用するから、傍受されにくい。海軍はとにかく船で港を出入りして、短波で通信をせざるを得ない。そうすると傍受をされる機会が非常に多い。

それから指揮の結節が違つていいますかね、陸軍の場合は、中隊の上に大隊があり、大隊の上に連隊がおつて、ずいっと竹の節のように、指揮系統が上がっていくわけですが、海軍の場合には、たとえば巡洋艦一隻がある任務を持ちますと、それが連合艦隊司令官に電報を打つということだつてあり得るわけでありまして、同じ暗号の種類を使う範囲が、陸軍よりも非常に幅が広い。

ということは、逆に一カ所被害を被ると、それが全海軍に及ぶということもあることも頭に入れておいていただく必要があります。

陸軍暗号の資料については、戦史室の岩島さん（防衛研究所戦史部長・岩島久夫氏）が詳しく調べておられます。いくつか書かれたものもございませぬ。結論から申しますと、陸軍の通信

文の翻訳は、昭和十八年の六月から十九年の十一月までは約四百通だけれども、十九年になってくると、十二万五千通に及ぶ資料が、アメリカの国立公文書館に残されておる。武官用とか、航空部隊用についても、これは昭和十八年ごろから相当な数量が解かれておるといふことが明らかであります。

### 陸軍の情報も筒抜けだった

これは中央公論の「歴史と人物」あたりで、いわゆる旧陸軍関係者との間で論争があったりしておりますので、読まれた方があろうかと思うんですが、とにかく論より証拠に、たとえば参謀総長から出された電報の中身をご覧になっておきます。

実際にアメリカの国立公文書館から手に入れた資料であります。『ジャパニーズ・アーミー』となっております。して、この内容は、マジックのサマリであります。

アメリカ側が日本の暗号を解いておったサマリ。毎日二十ページとか、三十ページとかの情報要約が、相当なレベルの指揮官に与えられて、それに基づいて彼らは作戦を立てたり、戦争を遂行したわけでございますが、その表紙というのはこんなもの（OP）なんです。

これ（OP）は昭和十九年二月十二

日の帝国陸軍命令による、第一方面軍、いわゆる関東軍の配備について述べた電報の表紙であります。

マジックというのはこういったような表紙であるということをご記憶いただきたいわけでありまして、これは昭和十九年の十一月二十八日の電報でありまして、二十二日付の陸軍参謀総長から出された太平洋方面における情勢見積りなわけです。

たとえばフィリピンのほうはどうであるか、どこはどうであるかということ、日本軍が、アメリカはどういう企図でおるかということ、打電しておるわけですけれども、ここにあるのは、アメリカがそれを解いて書いてあるわけですから、文書としては逆になっておるわけでございます。

この中身については、細かいことは述べませんが、このマジックにはちゃんと付表が付いております。中身が全部解かれておって、さらに付表まで付けられて指揮官に渡されておる。その付表を見ますと、十一月の二十二日付の日本が見積もった連合軍の勢力と、実際の比較はどうであるかというのが、このマジックにはついて、アメリカの司令官クラスには渡されておるわけですね。

たとえばフィリピンをみますと、日本の見積りではフィリピン方面は七個師団だと考えておる。実際の兵力は六個

師団プラス二個連隊である。日本の情勢見積りによると、可動の飛行機は二百五十機だとしておる。しかし、実際に可動の飛行機は約七百機である。以下、各方面について日本の情勢見積りと、その比較が載っているわけでありまして、これだけでも陸軍の暗号は全く解けなかったなどということはいえないわけでありまして。

それともう一つ、通商破壊の問題でございますが、たとえば陸軍の船舶暗号で、こういった電報（OP）が出るわけです。皆様の中で、ご両親、あるいはご兄弟を亡くされた方があったら、まことに申しわけないんですけども、こういう状態で解かれたんでは、もう通商破壊もくそもないわけですね。とにかく船は何月何日の何時にどこにおるかということ、全部、相手に知らしておるわけですから、潜水艦で攻撃をされたら、生き残ることは不可能だということでありまして、こういった状態でありました。

### 潜水艦から盗まれた陸軍暗号

ただ、陸軍の暗号の強さから考えてそれを擁護する意味で一言敷衍しますと、結局、われわれが想像だにしない作戦が、実は幾つか行われておるんです。これはいわゆる敵の暗号書、すなわち日本軍の暗号書を奪取するための

作戦が幾つか立てられております。

ここに掲げた潜水艦の写真（OP）は、昭和十九年の春に、第二十二潜水艦任務群のギャラリー大佐といものが発案をいたしました。とにかく潜水艦を分捕ろうじゃないかという作戦を立てて成功したものです。分捕れば、その中に積んでいる暗号書も何もみな手に入れることができるわけですね。

それで、とにかくまず爆雷攻撃をしますと、潜水艦は浮上してきます。そして自沈装置を作動させるわけですが、これも作動させちゃ沈んでしまいます。だから、作動させる前にそれも止める。次に海水弁ですね、弁を開くことも、これを開かしちゃ沈んでしまう。とにかく瞬時にそれを奪う。ちょうどテレビや劇場映画と同じようでありまして、実際にそれに成功して、Uボートに乗っ取ったところの写真でございます。

先程ライシャワー博士の話をしましたけれども、たとえば日本の潜水艦の記録では、昭和十九年の一月に、ライシャワー博士が書いておられるんですね、非常に大量の陸軍の暗号書を手に入れることができた。しかし、日本では該当する潜水艦事故というのは、暗号書と関連した形では書かれていないんです。

しかし、これも実は、海軍による陸軍の暗号書の輸送に、彼らが仕掛けた



長田 順行氏

大きな毘であったということを、暗黙のうちにも認められました。

### 信じられないほどの

#### 海軍の暗号軽視

それでは、なぜ、こういう状態になったかだけを一言触れておきますと、結局、帝国海軍では、海軍兵学校を出たような、いわゆる「ほんちゃん」の人間を、暗号解読者、あるいは暗号の

運用責任者に育てるということについて、非常に怠ったということが結論であらうと思うんですね。

記録を見ますと、信じられないんですけれども、とにかく第一次世界大戦で暗号の重要なことはわかった。そこで昭和三年に初めて三名の専科学生を養成した。とにかく一年間だけ暗号の勉強をさせたというわけです。

それから水雷学校に暗号専攻科学生を置いて、一回と二回の卒業生は出した

けれども、とにかく暗号も通信も一緒じゃないか、だから何も分けて教育する必要はない、一緒にやれというようなことで、それからはずーっと暗号の専攻科学生というのは行われてはいない。そして開戦の年に一人だけ養成した。これが記録なんです。

あの大海軍ですね。しかもほんちゃん、いわゆる海軍兵学校を出たバリバリの、いわゆる頭脳明晰なというか、私も兵学校で頭脳は悪いほうですけども(笑)、そういうものを、暗号に投入した形跡はほとんどないということでありますから、海軍は自らつくった暗号を自らの尺度ではかつて、いいとしたわけですけれども、そのはかりに人を持たなかったということが、まずいえると思うわけです。

海軍のくせに陸軍の肩を持つようですが、東条さんは非常に評判が悪いわけですけれども、陸軍は昭和十九年といますと、すでに戦いの帰趨は明らかであったにもかかわらず、陸軍の暗号学理研究会というものを発足をさせているわけです。

そして参謀総長として彼が訓示をしているわけですが、「暗号に学術的基礎係を付与し、なおさらに新暗号方式の創案につとむるは、現戦争下喫緊の要望である」ということで、当時文化勲章をもらわれました東大の高木貞治博士門下の俊英を、この部門に

全部投入をされるわけです。

ここに名前のある方々(OP)、今では文化勲章をもらわれたような方を含む、学会の重鎮であります。こういった人たちがわずか一年半であっても、陸軍は、最後の最後まで暗号の研究というものには力を抜かなかった。

そこに陸軍暗号の、本来強かった理由があるというように思うわけであります。

### 性懲りのない国民性

最初にも述べましたけれども、現時点でも暗号の戦争は、好むと好まざるにかかわらず、刻々と続けられておられます。

最後の締め括りにいたしますけれども、数年前のサンケイの『正論』に会田雄次先生が「性懲りのない国民性、精神平和主義を排す、暗号解読など現実的な努力を」という記事を書いておられます。

書いてある内容はどういうことかといいますが、権謀術数の現在の国際社会の中で、一つの国が実際に独立を維持して行くためには、とにかく外交の優位以外にはない。そのためには、こちらの手の内は知られないように、相手の手の内は先に読み取るようにする必要はある。

それはとりもなおさず、こちらの暗

号は解かれないうちに、そして向うの暗号はできるだけ解くようにすべきだ。これは軍備を持つとか持たないということ以前の、いわゆる国の独立を維持して行く上のイロハのイの字であるということをお田雄次先生はいつておられるわけでありませう。

私はきょうは過去の話を申し上げたようでありませうけれども、現実には暗号の戦争は続いておるわけでありましてわれわれは国民である以上、これらの枠内から逃れることができないわけで、この過去の教訓を現在に生かして、少しでも努力をしなければならぬと思ふ次第でございます。

最後はちょっと時間の都合で省略しましたけれども、以上をもって私の講演を終わります。

**質問** 外務省の暗号でございますけれども、たとえば加瀬俊一先生なんかは、日米交渉という中において、外務省の暗号を、アメリカが文脈よりも過剰に悪意に解釈をして、そのために日本の交渉がうまく行かなかった面があるんだということもいわれておりますけれども、外務省の暗号のアメリカ側の解説というのは、いかがなものだったのでしょうか。

もう一つは、日本のほうも暗号解説というのをやっていたと思うんですが、その辺はどのぐらい解いていたのかと

いうことについて教えていただきたいと思ふます。

**長田** 最初の質問につきましては、正確な数字は忘れましたが、昭和十六年の三月から開戦までにワシントンと日本の間で行き来した電報の数は、約二百九十三通であったと思うんですが、その中の数通を除いたものは、ほとんど正しく解説をされておったのが実情であります。

それから海軍も陸軍も暗号の解説部隊は持っておりましてけれども、これが拡充をされますのは、阿川弘之先生のような、予備学生の一期、二期の人們が昭和十七年、十八年ごろから、海軍に入ってからのことです。しかし、少なくとも日本海軍について、解説の成果が作戦に影響をしたというようなものはないことがございませう。

また陸軍も先程ご覧に入れましたM-209という暗号機は、一時解いておられますけれども、しかし、これも野戦部隊の暗号でありまして、これも作戦に影響したということは聞いておりませう。したがって、守るも攻むるも、日本陸海軍は暗号については負けたということだろうと思ふます。

**質問** 『ブラック・チェンバー』という本では、ワシントン会議の時に、解けていたということが出ております

が、そういう本も日本で翻訳されたと思うんですが、それにもかかわらず日本の暗号が解読されていんだという神話があったという原因は、結局、国民性に帰するのでしょうか。

**長田** 高坂正堯先生とNHKで対談をした時も、やはり農耕民族というのは、本質的に情報の収集ということがどうも弱いんだというように高坂先生がいわれて、なるほどなと思つたんですけれども、ですから、お田雄次先生が性懲りもない国民性であるとおっしゃっているんだと思ふんです。

**質問** 戦時中、商船は海軍徴用や陸軍徴用になっていましたので、海軍の暗号が解読されていたとすれば、海軍御用船の航行に関する暗号はすべて解読されていたというふうに理解してよろしいでしょうか。

**長田** 結構でございます。

## 新刊 太平洋戦争 暗号作戦

本書は、太平洋戦争中、アメリカ太平洋艦隊司令部で、日本海軍の暗号解読と無電通信解析の中心人物であった故エドウィン・T・レイトン海軍少将の回想録 (AND I WAS THERE) の翻訳である。

本書を読んで痛感するのは情報というものの恐るべき価値であり、これを疎かにした、考えられないほどの日本軍のだらしなさである。連合艦隊司令部の福留参謀長はバラオからフィリピンへ逃げる際、セブ島沖に不時着してゲリラにつかまり、作戦計画書をそっくり取り取られている。また、暗号解読により日本の輸送船の位置や針路が知られ、次々と潜水艦に沈められたのは痛ましい。

太平洋学会第9回研究大会で、日本暗号協会会長の長田順行氏は、「歴史は歴史に参加する人々にとってのみ、すなわち未来に情熱を抱く人々のためにもみ歴史である」というヴァレリの言葉を引いて暗号戦を講じたが、本書のような文献によって、国民性の弱点を明確に把握しておかないと、日本人は性懲りもなくいつか再び同じ失敗を冒すのではないかと思ふ。

〔毎日新聞外信グループ訳、一九八七年三月、TBSブリタニカ刊、上下巻各二千円〕